

親密性の違いに着目した発話の重なり方と 会話事態の認知

牛田 梨恵香^{*1}・小川 一美^{*2}・斎藤 和志^{*2}

問題と目的

会話はコミュニケーションの中でも、最も日常的で頻繁に行われているもののひとつである。会話は二者間でつくられるものであるため、どちらか一方の話者だけでなく、両者によって作り出される要素に注目する必要もある。

そこで、本研究では二者で作られるものの中でも「盛り上がり」に注目する。では、盛り上がりとは一体どのような状態なのだろうか。先行研究において、「盛り上がっている状態」に関する定義がいくつか挙げられている。例えば、伊藤・重野・西本・荒木・新美(2002)は、盛り上がった状態とは対話が活性化し、話が弾んでいる状態と定義した。具体的には、会話者各々が現在の会話を楽しんでいる、会話者各々が対話に熱中している状態としている。徳久・寺嶋(2006)では、盛り上がっている状態とは、楽しそうに話していたり、相手の話に聞き入っている状態としている。これらの先行研究から、盛り上がりの状態は大きく二つに分けることができる。一つ目は、会話が活性化している状態、二つ目は、会話に没頭し、じっくりと話している状態である。今回はこれら二つの状態を盛り上がっている状態とすることとした。

伊藤ら(2002)は、二者の自由な15分間の会話を、盛り上がっている状態とそうではない状態に分け、この二つの状態を比較することで盛り上がっている状態にはどのような行動が多く見られるのかについて検討した。まず、収録された動画から動作の書き出しを行い、書き出した動作の開始時間と終了時間を測定した。そして、「発話」「うなずき」「笑う」の重なり時間と発話の間、発話が重なりあっている区間において、同時に発生した他の動作に注目し、盛り上がっている状態とそうではない状態の比較を行った。その結果、対話が活性化するほど、お互いが話しているときに生じる「発話」と「笑い」と「うなずき」の重なり状態が発生する頻度が高くなることがわかった。つまり、盛り上がっている状態のときには、盛り上がっていない状態に比べて、発話と笑いとうなずきの重なり状態が多くなるということであった。発話の重なり状態は二者でつくられるもの一つであるため、会話をとらえる指標として有効であるだろう。

自己の発話の優先による割り込みの結果生じる発話の重なりは、妨害目的ではなく、また先の話者に不快感を与えていなければ、会話の効率化、発展に寄与し、会話の進行に対してプラスに作用すると考えることができると生駒(1996)は指摘している。その一方で、妨害目的による発話の重なりは、スムーズな話者交替を妨げ、情報の伝達に支障をきたすため、会話を一時停滞させる会話

※1 心理学研究科 博士前期課程

※2 コミュニケーション心理学科

進行上のトラブルとなる。このように、発話の重なりでも、会話の進行においてプラスに作用するものとマイナスに作用するものがある。重なりがプラスに作用する、あるいはマイナスに作用する重なりとはどのようなものであるかを明らかにするためには、発話の重なりを何種類かに分類して考えるべきであろう。

藤井・大塚 (1994) は、発話の重なりを、発話の重なりが生じる要因ごとに行っている。要因は四つに分けられ、次の話し手になろうとする複数の者が同時に話し始めることによって重なりが起こる「自己選択競争」によるもの、発話を重ねることを承知で、他の話者が発話を行うことによって重なりが起こる「割り込み」によるもの、先行発話が終わったとみなしたことによって重なりが起こる「みなし」によるもの、自分の発話が終了した後、次の話者の発話がすぐに途切れた場合、発話権が続いていると考えたことによって重なりが起こる「継続」によるものがあげられている。そして、友人同士の会話の重なり機能、種類、頻度について調査・分析を行った。その結果、発話の重なりのうち半数以上が「割り込み」によるものであった。また、全ての発話の重なりのうち、42.0%が協力的な発話の重なりであった。協力的な発話の重なりとは、トピックの変更をしない、発話権の移動がない、先行発話の展開を助けるという三つの基準を満たす発話の重なりを指す。ただし、協力的かどうか判断が難しい発話の重なりもあり、実際には42.0%以上の協力的な発話の重なりがあると考えられると藤井・大塚 (1994) は指摘している。以上より、発話の重なりは会話を盛り上げ促進させる協力的な側面を多く持っているということが示唆されている。

藤井 (1995) は、重なりが生じるタイミングによって発話の重なりを分類した。同時に話し始める「同時開始型」、先行話者の発話が終わったとみなし終了間際で重なる「終了みなし型」、相手の発話が明らかに終わっていない状況で発話を重ねる「割り込み型」の三種類であった。その中でも特に「意図的」とされるタイプである「割り込み型」をさらに「トピックの一致」と「発話権の維持」の二つを軸とした機能に基づき分類した。そして、重ねた発話が先行発話のトピックと一致し、また先行話者の発言権も維持されていると判断できる場合を「調和系」とし、先行話者の発言権は維持されているが、トピックが部分的にでも異なっている場合を「調整系」、先行話者の発言権が維持されていない場合を「独立系」とした。「独立系」は「妨害」と解釈されるような発話権の脅かしがみられる重なりである。そして、「調和系」「調整系」「独立系」それぞれの出現率を調べた結果、「独立系」が最も少なく (18.7%)、「調和系」の発話の重なりが最も多く (54.9%) みられた。この結果からも、発話の重なりには会話を妨害するものと促進するものがあり、会話の状況によっては促進する機能が多くみられることがわかる。

藤井 (1995) は、発話の重なる位置からさらに、「意図的」とされるものみに焦点をあてて分類したが、発話の重なる位置によっても、発話の重なり機能は異なると考えられる。発話の重なりを、重なり位置によって「発話の頭と頭が重なる」場合、「先行発話の途中で重なる」場合の二つに分類できる (生駒, 1996)。「発話の頭と頭が重なる」場合は、意図的に行われることも稀にあるかもしれないが多くは偶然である。さらに、「先行発話の途中で重なる」場合は、意図的な場合と非意図的な場合に分けることができる。意図的な場合は、藤井 (1995) における「割り込み型」にあたり、非意図的な場合は「終了みなし型」にあたりと考えられる。また、「先行発話の途中で重なる」場合は、さらに位置によって「途中で部分的に重なる」場合と「終了付近で重なる」場合

との二種類に分けることができる。ただし、生駒 (1996) の結果から、同じ位置の重なりであっても、その性質によってはプラスに作用する場合とマイナスに作用する場合がある。重なりの位置のみで重なりの機能を完全に分類することはできないが、位置によって機能がある程度つかむことはできるだろう。また、重なりといっても自分から相手の発話にかぶせる重なりと、相手からかぶせられる重なりがある。本研究では、これを「かぶり」、「かぶられ」として区別する。

そこで、「割り込み型」で会話を促進する働きが多かったという藤井 (1995) の結果に基づき、藤井 (1995) の「割り込み型」に相当する「途中」の重なりが多いときのほうが、発話権の交替がおこる「末尾」の重なりが多いときよりも、会話事態の認知を好意的に解釈するだろうという仮説を立てた。

さらに、会話中の非言語行動は親密さの反映でもある。大坊 (2005) によれば、親密さが高いと、非言語的コミュニケーション行動は、一般に活発になる。具体的には、好意によって視線や発言が増大し、距離も近くなる。さらに、未知の者同士の相互作用では相互作用の程度が上昇すると、会話行動の流暢性が増し、活発になることが示唆されている。つまり、親密であるほど、会話が活発になると考えられる。盛り上がるの一側面に会話が活発になるという定義がある。そこで、親密性の高いペアと初対面のペアで、会話事態の認知と発話の重なりを比較検討する。友人ペアの場合では親密性が高いため、日常から盛り上がる会話が多いと考えられる。そのため、発話の重なりと会話事態の認知との関係は小さいということも考えられる。また、友人同士では日常からコミュニケーションを多く行っているため、実験中の3分間の会話によって会話相手の印象や魅力が変化することは考えにくい。しかし、初対面ペアにおいては、初めて会話をするため、会話を通して相手の印象や魅力が変化するだろう。そこで、以下の仮説を立てる。親密性の高い友人ペアは親密性の低い初対面ペアに比べて、発話の重なりが多くなるだろう。また、友人ペアよりも初対面ペアのほうが会話を通じて印象や魅力が大きく変化するだろう。そして、友人ペアでは発話の重なり方によって、盛り上がり認知度や、会話満足度が影響を受けることはないだろう。

方法

実験実施時期

2008年6月下旬から7月中旬にかけて実施された。

実験参加者

A 県内の女子大学生24組48名であった。初対面ペアの年齢は、19歳から25歳までの範囲であり ($M=21.08$, $SD=1.10$)、学年は、2年生2名、3年生4名、4年生18名であった。友人ペアの年齢は、19歳から22歳までの範囲であり ($M=20.75$, $SD=0.99$)、学年は2年生4名、3年生8名、4年生12名であった。なお、同学年の実験参加者によってペアを構成した。初対面ペアは、親密性の評定において、互いを「全く知らなかった」もしくは「顔を見たことはあった」と評定したペアであった。友人ペアは親密性の評定において「頻繁に話をしている」「悩み事の相談をしたことがある」と評定したペアであった。

手続き

初対面ペアの場合、実験参加者が実験者の指定した待ち合わせ場所へ来たら、早く来たほうから

順に実験室に案内した。友人ペアの場合、実験参加者のペアのうちの一人に実験の参加をお願いし、仲の良い友人を連れてきてもらうようにした。そして、指示があるまで、会話をしないようにという教示を行った。

まず、会話を行う前に会話相手の印象、魅力、テーマに対する興味度、重要度、会話相手との親密性、実験参加者の学年、年齢、学科を問う評定用紙に記入してもらった。このとき、実験参加者は同じ机でお互いに向かい合って座ったまま質問項目を評定した。4分程度したら、記入が済んだのを見計らって質問紙を回収した。

その後、会話に関する実験であること、会話内容の評価を目的とはしていないことを教示し、ビデオ撮影の許可をとった。その後、口頭で会話のテーマを与えた。初対面ペアの場合のみ簡単な自己紹介をするように教示し実験者は退室した。

3分後、実験者が実験室に入室し、会話をやめるよう指示した。その後すぐに、会話の印象、会話満足度、会話の盛り上がり、会話相手の印象、会話相手の魅力について、評定用紙への記入を求めた。

テーマ

本研究では、雑談場面での盛り上がりについて検討することが目的だったため、徳久・寺嶋(2006)で使用されたもののうち、大学生にとって話しやすく、馴染みのありそうな「旅行」「食べ物」「趣味」「最近買ったもの」「テレビ番組」を会話のテーマとして採用した。この5つの中から3つをランダムに選んでテーマを与えた。

評定用紙

会話前の評定用紙は、以下の①相手の印象、②相手の魅力、③テーマに対する興味度と重要度、④会話相手との親密性、実験参加者の学年、学科、年齢を問う項目で構成されていた。会話後の評定用紙は、⑤会話に対する印象、⑥会話満足尺度、⑦会話の盛り上がり度、①相手の印象、②相手の魅力で構成されていた。

①相手の印象：大橋・三輪・平林・長戸(1973)の印象評定20項目は、林(1978)によって「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」の3因子が抽出されている。この印象評定20項目のうち、林(1978)の因子分析結果をもとに、各因子から、因子負荷の高い項目順に3項目ずつを選び、計9項目を使用し、会話相手の印象を測定した。「個人的親しみやすさ」因子の項目は、「人のよい—人の悪い」「親しみやすい—親しみにくい」「感じのよい—感じの悪い」であった。「社会的望ましさ」因子の項目は、「無責任な—責任感の強い」「慎重な—軽率な」「無分別な—分別のある」であった。「活動性」因子の項目は、「うきうきした—沈んだ」「社交的な—非社交的な」「消極的な—積極的な」であった。形容詞対を両極に配置し、7段階(1：非常によく当てはまる～4：どちらともいえない～7：非常によく当てはまる)で評定を求めた。

②相手の魅力：中村(1988)の対人魅力評定は、「相互作用因子」「情緒的因子」の2因子が抽出されているため、中村(1988)の非類似の他者に対する魅力の研究における研究I、IIともに同じ因子に属していた項目のうち、各因子から因子負荷の高い順に3項目ずつを選び、計6項目を使用した。「相互作用因子」の項目は、「好感が持てる」「援助したい」「相談に乗りたい」の3項目であった。「情緒的因子」の項目は、「気が合う」「力づけたい」「話が合う」の3項目であった。それぞれ

の項目に対して、7段階 (1:全く当てはまらない~7:非常によく当てはまる) で評定を求めた。

③テーマに対する興味度と重要度:大坊 (1977) は、話題に対して、興味領域・知識領域・関わり領域・印象領域の4つの観点から話題の重要度評定を行っていた。今回はこのうち、興味領域の観点に基づき、実験参加者が会話した会話のテーマに対する興味度を測定した。さらに、実験参加者にとって、会話のテーマがどの程度重要であるかについてもたずねた。「まったく興味がない」から「非常に興味がある」の7段階評定で回答を求め、重要度については「まったく重要でない」から「非常に重要である」の7段階評定で回答を求めた。

④会話相手との親密性:親密性の操作チェックのために、木村・余語・大坊 (2005) において使用された相手との関係性を問う質問項目を使用した。「全く知らなかった」「顔を見たことはあった」「あいさつをしたことがあった」「たびたび話をする機会があった」「頻繁に話をしている」「悩み事の相談をしたことがある」「その他」の中から、二人の関係に該当する選択肢を一つ選択するように求めた。

⑤会話に対する印象:会話に対する印象を測定するため、小川 (2000) による会話に対する印象尺度を採用した。小川 (2000) では、「快因子」という1因子性が確認されているため、因子負荷の高い順に6項目を選び、使用した。項目は、「魅力のある会話—魅力のない会話」「息のあった会話—息の合わない会話」「不活発な会話—活発な会話」「テンポのよい会話—テンポの悪い会話」「不快な会話—快い会話」「反応の早い会話—反応の遅い会話」の6項目であった。それぞれの項目対を両極に配置し、7段階 (1:非常によく当てはまる~4:どちらともいえない~7:非常によく当てはまる) で評定を求めた。

⑥会話満足尺度:会話満足度を測定するため、木村ら (2005) がBernieri, Gillis, Davis, & Grahe (1996) の主観的ラポール感に関する18項目尺度の質問文を邦訳したものを使用した。このうち、木村ら (2005) の研究2において使用された、「会話調整因子」「会話集中因子」「ぎこちない会話因子」の3因子から因子負荷量の高かった項目を順番に二つずつ選んだ6項目を使用した。「会話調整因子」の項目は「会話をうまく調整することができた」「協力的に会話が進んだ」の2項目、「会話集中因子」の項目は「好意的に会話ができ」「相互に興味をもって会話に取り組んだ」の2項目、そして「ぎこちない会話因子」は「緊張する会話だった」「ぎこちない会話だった」の2項目であった。ただし、本研究では得点が高いほど会話に満足しているとしたため、「ぎこちない会話因子」ではなく「円滑な会話因子」と名前を変更した。会話満足尺度の各項目に対して「まったくその通りでない」を1点、「まったくその通りだ」を8点として評価を求めた。

⑦会話の盛り上がり度:先行研究を参考に筆者が独自に作成した5項目からなっている。伊藤ら (2002) は、盛り上がり度を「1. 話者各々が現在の会話をたのしんでいる」「2. 話者各々が対話に熱中している」と定義していた。また、徳久・寺嶋 (2006) では、盛り上がり度とは「楽しそうに話していたり、相手の話に聞き入っている対話」としていた。そこで、盛り上がり度を評定する項目として「会話に熱中できた」「会話は楽しかった」という項目を設けた。また、木村ら (2005) において、会話の盛り上がった時期を、「もっとも会話がうまく進んでいた時期」として問うものがあつた。そこで、「会話はうまく進まなかった」(逆転項目) という項目も設けた。さらに、「話は弾んだ」「会話は盛り上がった」という項目を設けた。各項目に対し「まったくその通りでな

い」を1点、「まったくその通りだ」を8点とする評価を求めた。

結果と考察

分析の指標

分析にあたり、発話の重なりは、両方の会話者が同時に音声を発した時とし、その回数と時間を測定した。また、相づちも発話の一部であると考え、重なりとして含めた。ただし、笑い声は音声であるものの、発話としてはとらえにくいと考え、重なりには含めなかった。さらに、3分間の会話の中で発話の重なった秒数の総数を回数の総数で割ったものを「秒数/回数」指標とした。表1、表2では「発話の頭と頭が重なる」場合を「同時発言」、「先行発話の途中で重なる」場合のうち、発話の重なりが先行発話の途中から始まり、先行発話が終わってもかぶった発話がつづいている場合は「終了付近で重なる」とし、「末尾」と表記した。発話の重なりが先行発話の途中から始まり、先行発話が終わる前に発話の重なり状態が終了した場合を「途中で部分的に重なる」とし、「途中」と表記した。「末尾」では、先行発話者をかぶられた話者とし、後に話し始めた話者をかぶった話者とした。「途中」でも同様に先行話者をかぶられた話者とし、途中で重ねた話者をかぶった話者とした。また、「途中」と「末尾」を合計したものを「合計」とした。なお、「同時発言」は二者が同時に話し始めるため、かぶりとかぶられの区別をすることはできない。

評定に関しては、それぞれの下位尺度について得点化を行った。盛り上がり認知は点が高いほど、会話者が会話は盛り上がっていたと認知していたことを示す(盛り上がり認知)。会話に対する印象は得点が高いほど、会話に対する印象がよいことを示す(会話に対する印象)。会話満足度はそれぞれ、点が高いほど会話は、円滑であった(円滑な会話)、会話をうまく調整できた(会話調整)、会話に集中できた(会話集中)と認知していたことを示す。相手に対する印象は、それぞれ点が高いほど、個人的に親しみやすい(親しみやすさ)、社会的に望ましい(望ましさ)、活動的である(活動性)と会話相手を認知していたことを示す。また、相手に対する魅力はそれぞれ、点が高いほど、相互作用を持ちたい(相互作用)、情緒的な魅力がある(情緒的)と会話相手を認知していたことを示す。また、相手に対する印象や魅力は、会話によってどのように相手の印象や魅力が変化するかを測定する必要があったため、会話後の評定値から会話前の評定値を引いた会話前後での変化量を指標とした。したがって、点が高いほど会話後に当該得点が上昇したことを意味する。

友人ペア、初対面ペアにおいて、それぞれの発話の重なり量と盛り上がり認知得点、会話に対する印象得点、会話満足度得点、相手に対する印象得点の変化量、相手に対する魅力得点の変化量の各平均値と標準偏差、相関係数を算出した。その結果を表1(友人ペア)、表2(初対面ペア)に示した。

重なりおよび会話事態の認知における初対面と友人の比較

初対面と友人で各種発話の重なり量、盛り上がり認知得点、会話満足度得点、会話に対する印象得点、相手に対する印象得点の変化量、相手に対する魅力得点の変化量に違いがあるかを調べるため、対応のないt検定を行った。以下に有意な結果が得られたもののみを示す。

末尾の発話の重なった回数、秒数は友人ペア(回数： $M=2.92$, $SD=2.19$, 秒数： $M=1320.83$, $SD=1072.17$)よりも初対面ペア(回数： $M=5.08$, $SD=3.69$, 秒数： $M=2433.33$, $SD=1967.71$)

表1 友人ペアにおける発話の各種重なりと各尺度との相関

		平均値 (標準偏差)	盛り上がり	会話に	会話満足度	相手に対する印象			相手に対する魅力				
			認知	対する印象	円滑な会話	会話調整	会話集中	親しみやすさ	望ましさ	活動性	相互作用	情緒的	
			31.67(5.00)	32.21(5.00)	12.38(3.38)	11.96(1.73)	13.42(2.12)	-0.46(3.09)	-1.00(3.06)	1.96(4.18)	-0.52(2.69)	-0.46(1.84)	
同時発言	回数	0.67 (0.87)	.124	.127	.039	-.067	.149	.054	-.016	-.096	.196	.063	
	秒数	416.67 (579.10)	.125	.065	-.003	.038	.167	.038	.000	-.190	.168	.028	
	秒数/回数	611.11 (161.64)	.231	.093	.184	.127	.278	.128	-.057	-.168	.223	.152	
かぶり	末尾	回数	2.92 (2.19)	.173	.276	.263	-.001	.176	.046	-.078	-.024	-.097	-.161
		秒数	1320.83 (1072.17)	.218	.296	.309	.057	.299	.061	-.127	-.055	.051	-.079
		秒数/回数	449.17 (193.17)	.271	.442*	.343	.049	.486*	.289	-.290	.196	.208	.157
	途中	回数	3.75 (2.92)	-.164	.045	.404*	-.114	-.011	-.129	-.015	-.136	.109	-.329
		秒数	2300.00 (1977.04)	-.165	.021	.382†	-.118	-.006	-.166	-.081	-.119	.024	-.362†
		秒数/回数	536.67 (213.24)	.041	.253	.200	-.347†	-.028	-.016	-.196	-.133	-.144	-.147
	合計	回数	6.67 (4.39)	-.023	.168	.400†	-.076	.081	-.063	-.048	-.103	.025	-.299
		秒数	3620.83 (2668.66)	-.034	.134	.407*	-.065	.116	-.098	-.111	-.110	.038	-.300
		秒数/回数	488.59 (153.34)	.114	.413*	.478*	-.242	.249	-.032	-.291	-.044	.072	-.037
かぶられ	末尾	回数	2.92 (2.19)	.344	.173	.251	.022	.176	-.135	.045	.038	.222	.260
		秒数	1320.83 (1072.17)	.384†	.251	.271	.099	.273	-.061	.074	.123	.305	.307
		秒数/回数	449.17 (193.17)	.249	.332	.276	.133	.199	-.062	.182	-.074	.584**	.194
	途中	回数	3.75 (2.92)	.468*	.426*	.202	-.045	.382	.213	-.063	.149	.264	.422*
		秒数	2300.00 (1977.04)	.539**	.433*	.259	.001	.401†	.226	-.058	.145	.276	.486*
		秒数/回数	536.67 (213.24)	.305	.345†	.402†	-.301	-.082	-.027	-.202	-.217	.061	.187
	合計	回数	6.67 (4.39)	.483*	.369†	.260	-.019	.342	.075	-.019	.118	.286	.411*
		秒数	3620.83 (2668.66)	.554**	.422*	.301	.041	.392†	.143	-.013	.157	.327	.483*
		秒数/回数	488.59 (153.34)	.414*	.433*	.228	-.072	.077	.185	.066	-.038	.235	.213

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表2 初対面ペアにおける発話の各種重なりと各尺度との相関

		平均値 (標準偏差)	相手に対する印象					相手に対する魅力				
			盛り上がり 認知	会話に 対する印象	円滑な会話	会話満足度 会話調整	会話集中	親しみやすさ	望ましさ	活動性	相互作用	情緒的
			29.29(6.74)	31.75(5.81)	10.79(3.19)	10.67(2.48)	12.42(3.02)	1.08(2.26)	-0.46(2.96)	2.25(2.86)	0.88(2.42)	1.25(2.59)
同時発言	回数	0.75 (0.85)	.326	.181	.253	.290	.008	.261	.351†	.439*	.090	.267
	秒数	608.33 (772.86)	.277	.021	.115	.011	-.091	.007	.167	.188	-.202	-.005
	秒数/回数	433.33 (569.64)	.383†	.086	.124	.050	.079	.018	-.337	-.294	-.391†	-.162
かぶり 末尾	回数	5.08 (3.69)	.133	.282	.289	.051	-.089	.171	.095	.368†	.103	.447*
	秒数	2433.33 (1967.71)	.169	.193	.342	.088	-.129	.314	.168	.506*	.102	.440*
	秒数/回数	447.15 (210.65)	.335	.021	.376†	.128	.019	.159	.403†	.405	-.088	.053
途中	回数	4.17 (3.67)	.058	.353†	-.001	-.046	-.132	.276	.015	-.178	-.007	.009
	秒数	2529.14 (2141.61)	.250	.479*	.155	.158	.074	.359†	.027	-.142	.046	.089
	秒数/回数	564.26 (288.06)	.385†	.481*	.259	.293	.413*	.063	-.351	.041	.105	.226
合計	回数	9.25 (5.69)	.124	.410*	.187	.003	-.143	.289	.072	.124	.062	.296
	秒数	4962.50 (3022.50)	.287	.465*	.332	.169	-.032	.459*	.128	.229	.099	.350†
	秒数/回数	535.06 (203.44)	.420*	.356†	.321	.358†	.326	.265	.050	.265	.044	.135
かぶられ 末尾	回数	5.08 (3.69)	.345†	.288	.182	.431*	.195	.368	.456*	.125	-.140	-.048
	秒数	2433.33 (1967.71)	.365†	.313	.173	.441*	.254	.262	.455*	.282	-.061	.120
	秒数/回数	447.15 (210.65)	.283	.264	.081	.222	.237	.304	.020	.196	.197	.321
途中	回数	4.17 (3.67)	.267	.414*	.550**	.260	.158	.192	.311	-.046	-.140	-.119
	秒数	2529.17 (2141.61)	.359†	.491*	.581**	.432*	.298	.264	.319	-.063	-.061	-.095
	秒数/回数	564.26 (288.06)	.358†	.413*	.307	.572**	.494*	.385	-.105	-.007	.197	-.043
合計	回数	9.25 (5.69)	.396†	.454*	.473*	.447*	.229	.363	.497*	.052	-.140	-.108
	秒数	4962.50 (3022.50)	.492*	.551**	.524**	.593**	.377	.358	.522**	.139	.020	.011
	秒数/回数	535.06 (203.44)	.446*	.535*	.291	.506*	.561**	.164	-.158	.316	.354	.241

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

の方が多かった (回数: $t(37.34) = 2.47, p < .05$, 秒数: $t(35.55) = 2.43, p < .05$)。つまり、友人ペアよりも初対面ペアのほうが末尾で発話が重なる秒数、回数ともに多かった。また、会話満足度の円滑な会話尺度において初対面ペア ($M = 10.79, SD = 3.19$) よりも友人ペア ($M = 12.83, SD = 3.38$) の方が得点が高かった ($t(46) = 2.15, p < .05$)。つまり、初対面ペアよりも友人ペアの方が会話が円滑であったと判断していた。これらは、友人ペアは初対面ペアよりも普段から会話を行っていることによって、会話がスムーズに進むからだろう。また、初対面ペアではぎこちなさを解消したいために、間を作らないようにし、末尾での重なりが友人ペアよりも多くなったと考えられる。

そして、対人魅力の情緒的尺度において友人ペア ($M = -0.46, SD = 1.84$) よりも初対面ペア ($M = 1.25, SD = 2.59$) の方が会話前後の変化得点が高くなっていた ($t(46) = 2.15, p < .05$)。つまり、友人ペアよりも初対面ペアの方が会話を通して会話相手に対して情緒的魅力が上昇したことがわかった。友人ペアではすでに魅力が高まっており、3分間の会話で魅力が上昇することは考えにくいから、このような結果になったと考えられる。

重なりと会話に対する評価の関係

盛り上がり認知得点と以下の発話の重なりとの間に有意な相関がみられた。友人ペア、初対面ペアともに、かぶられた秒数の合計 (友人: $r = .554$, 初対面: $r = .492$)、かぶられた合計の一回あたりの秒数 (友人: $r = .414$, 初対面: $r = .446$) との間に有意な正の相関がみられた。友人ペアにおいてのみ、途中でかぶられた回数、秒数の間、かぶられた合計の回数との間に有意な正の相関がみられた (順に: $r = .468, r = .539, r = .483$)。一方、初対面ペアにおいてのみ、合計の一回あたりのかぶった秒数との間に有意な正の相関がみられた ($r = .420$)。

会話に対する印象得点と以下の発話の重なりとの間に有意な相関がみられた。友人ペア、初対面ペアともに、途中でかぶられた回数 (友人: $r = .426$, 初対面: $r = .414$)、途中でかぶられた秒数 (友人: $r = .433$, 初対面: $r = .491$)、かぶられた秒数の合計 (友人: $r = .422$, 初対面: $r = .551$)、かぶられた合計の一回あたりの秒数との間に有意な正の相関がみられた (友人: $r = .433$, 初対面: $r = .535$)。そして、友人ペアにおいてのみ、末尾でかぶった一回あたりの秒数、かぶった合計の一回あたりの秒数との間に有意な正の相関がみられた (順に: $r = .442, r = .413$)。一方、初対面ペアにおいてのみ、途中でかぶった秒数、途中でかぶった一回あたり秒数、かぶった回数の合計、かぶった秒数の合計、途中でかぶられた一回あたりの秒数、かぶられた回数の合計との間に有意な正の相関がみられた (順に: $r = .479, r = .481, r = .410, r = .465, r = .413, r = .454$)。

友人ペア、初対面ペアの両方において、かぶられのうち、「合計」と盛り上がり認知得点と有意な相関がみられ、「途中」および「合計」と会話に対する印象得点のそれぞれと有意な相関がみられた。このことから、親密性に関わらず、盛り上がりの認知や会話に対する印象が部分的ではあるが、かぶられと関係している可能性が示唆された。かぶられの「合計」の発話の重なりが多いほど会話に対する印象や盛り上がり認知得点が高かったことから、発話の重なりそのものが会話を促進する作用が大きいという藤井・大塚 (1994) の研究の結果とも一致する。また、「途中」での重なりとの相関はみられた一方で「末尾」との相関は見られなかったことから、発話の重なりのある位置によって会話事態の認知との関係が異なることがわかった。したがって、プラスに作用する発話の重なりは、会話を効率的に運び、活気のあるテンポの速い会話を生み出すという生駒 (1996)

の知見から、かぶられのうち、「途中」がこのような機能をもっていると考えられる。特に、友人ペアの盛り上がり認知得点は「末尾」の重なりよりも「途中」の重なりが多かった。「末尾」の重なりは、藤井(1995)によれば「終了みなし型」の重なりであり、非意図的な重なりだとされている。一方で、「途中」の重なりは「割り込み型」の重なりで意図的な重なりとしている。「末尾」よりも「途中」の重なりが多かったことから、友人ではより細かくかぶられを判断することができるため、かぶった側が意図してかぶせたという意図をかぶられた側が推測したことで、かぶられた側が盛り上がったと認知したのだろう。

会話満足度と以下の発話の重なりとの間にも有意な相関がみられた。友人ペア、初対面ペアに共通して有意な相関が見られたものはなく、友人ペアにおいてのみ、円滑な会話得点と途中でかぶった回数、かぶった秒数の合計、かぶった合計の一回あたり秒数との間に有意な正の相関がみられた(順に： $r = .404$, $r = .407$, $r = .478$)。会話集中得点については末尾でかぶった一回あたりの秒数との間にも有意な相関がみられた($r = .486$)。一方、初対面ペアでは、円滑な会話得点と途中でかぶられた回数、秒数、かぶられた回数の合計と秒数の合計の間に有意な相関がみられた(順に： $r = .550$, $r = .581$, $r = .473$, $r = .524$)。会話調整得点については、末尾でかぶられた回数と秒数、途中でかぶられた秒数と一回あたりの秒数との間に有意な正の相関がみられた(順に： $r = .431$, $r = .441$, $r = .432$, $r = .572$)。さらに、かぶられた合計の回数、秒数、一回あたりの秒数との間にも有意な相関がみられた(順に： $r = .447$, $r = .593$, $r = .506$)。そして、会話集中得点と途中でかぶった一回あたりの秒数、途中でかぶられた一回あたりの秒数、かぶられた合計の一回あたりの秒数との間に有意な正の相関がみられた(順に： $r = .413$, $r = .494$, $r = .561$)。以上のように、友人ペアでは会話満足度とかぶられの間に有意な相関はみられなかったものの、初対面ペアでは有意な相関がみられた。つまり、初対面ペアでは、かぶられることで会話が促進されるとそれを手がかりとして会話の満足度を判断していた可能性が考えられる。一方、友人同士の場合にはかぶられるということを手がかりに、会話の満足度を判断することがなくなるのかもしれない。しかし、会話満足度全体の平均値では、初対面ペアよりも友人ペアのほうが得点が高かった。したがって、友人ペアではかぶられることがなくても初対面ペアよりも会話に満足することが示唆された。

重なりと相手に対する印象および魅力の関係

友人ペア、初対面ペアに共通して有意な相関が見られたものはなく、友人ペアにおいてのみ、相互作用的魅力得点と末尾でかぶられた一回あたりの秒数との間に有意な正の相関がみられた($r = .584$)。情緒的魅力得点では、途中でかぶられた回数、秒数、かぶられた合計の回数と秒数との間に有意な正の相関がみられた(順に： $r = .422$, $r = .486$, $r = .411$, $r = .483$)。一方、初対面ペアにおいては、個人的親しみやすさ得点とかぶった秒数の合計の間に有意な正の相関がみられた($r = .459$)。社会的望ましき得点と末尾でかぶられた回数、秒数、かぶられた回数の合計、秒数の合計との間に有意な正の相関がみられた(順に： $r = .456$, $r = .455$, $r = .497$, $r = .522$)。活動性得点では、同時発言の回数との間に有意な正の相関がみられた($r = .439$)。また、末尾でかぶった秒数との間にも有意な正の相関がみられた($r = .506$)。情緒的魅力得点では、末尾でかぶった回数、秒数との間に有意な相関がみられた(回数： $r = .447$, 秒数： $r = .440$)。

印象、魅力得点は、会話前後の変化を見るため会話後の得点から会話前の得点を引いたものを使

用した。有意な相関がみられるということは、会話を通して生じた印象や魅力の変化に発話の重なりが関係していたことを意味する。友人ペアのみで相手に対する魅力とかぶられの一部の間に有意な相関がみられたのは、3分間の会話に対する相手の反応の敏感さが親密性によって異なる反映だと考えられる。初対面では、かぶられたことに関して会話相手の魅力にまで敏感に解釈することはできなかった一方で、友人では3分という短い会話ではあるものの、その会話を通しての微妙な変化に敏感に反応することができたのだろう。相手に対する印象に関して異なる特徴がみられたことは、相手に対する印象と魅力とを区別して考えることの重要性を示唆している。なお、初対面ペアにおける活動性と「同時発言」の間に有意な相関がみられたが、「同時発言」が全くみられないペア(友人ペア, 初対面ペアともに6組)があったほど、サンプル数が少なかったため、このような結果になったのだろう。「同時発言」に関してはよりサンプル数を増やして分析を行うことが今後の課題である。

今後の展開に向けて：重なりの特徴を中心に

本研究においては、発話の重なりを「かぶり」と「かぶられ」に区別した。しかし、主体的に行動として起こすことができるのは「かぶり」のみであり、意図的に「かぶられ」ようにすることは非常に困難である。また、意図的にかぶった場合の「かぶり」は「かぶせた」のであり、無意図的な場合は「かぶってしまった」ことになる。ところが、かぶられた側にとっては「かぶられた」という事態のみから、相手の意図が「かぶせた」のか「かぶってしまった」のかは明確には判断できない。行為者側は無意図的に「かぶってしまった」のに、被行為者側は意図的に「かぶせられた」と誤って意図を推測してしまうことが考えられる。また、行為者側に意図があるということを被行為者側がわかって、その意図がどのようなものであるのかを正しく理解できるかも問題となる。さらに、無意図的な「かぶってしまった」状態を規定する要因についても検討する必要があるだろう。このように、どのように発話の重なりを「かぶられた」側が認知したのかという点まで考慮した詳細な検討が今後は必要である。なぜなら、「意図」の判断によって発話の重なりをポジティブもしくはネガティブに判断していると考えられるからである。

本研究では、発話の重なりと会話事態の認知の親密性による違いを検討したが、親密性の違い以外にも、会話の目的によって発話の重なりと会話事態の認知の関係も変化することが考えられる。また、本研究では雑談場面のみを扱ったが、課題解決の場面においては、和やかに話をすすめることよりも結論を出すことが重視される。そのため、会話の目的が異なると会話行動がもたらす効果も異なる可能性が考えられる。今後はこのように、会話状況や文脈によって発話の重なりと会話事態の認知の関係がどのように影響されるのかということを検討していく必要がある。

引用文献

- Bernieri, J. F., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. E. (1996). Dyad rapport and the accuracy of its judgment across situations: A lens model analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 110-129.
- 大坊郁夫 (1977). 2人間コミュニケーションにおける言語活動性の構造 実験社会心理学研究, 17, 1-13.
- 大坊郁夫 (2005). 社会的場面における人間の非言語的な行動と親和性の向上 バイオメカニズム学会誌, 29, 118-123.

- 藤井桂子 (1995). 発話の重なりについて—分類の試み— 言語と日本語教育, 10, 12-23.
- 藤井桂子・大塚純子 (1994). 会話における発話の重なりについて—協力場面を中心に— 言語と日本語教育, 8, 1-13.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本的次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
- 生駒幸子 (1996). 日常会話における発話の重なり機能 世界の日本語教育, 6, 185-199.
- 伊藤秀樹・重野真也・西本卓也・荒木雅弘・新美康長 (2002). 対話における雰囲気分析 情報処理学会研究報告. SLP, 音声言語情報処理, 10, 103-108.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 (2005). 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 感情心理学研究, 12, 12-23.
- 中村雅彦 (1988). 非類似の他者に対する魅力 実験社会心理学研究, 27, 121-130.
- 小川一美 (2000). 初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 47, 173-183.
- 小川一美 (2008). 会話セッションの進展に伴う発話の変化: Verbal Response Modesの観点から 社会心理学研究, 23, 269-280.
- 大橋正夫・三輪弘道・平林進・長戸啓子 (1973). 写真による印象形成の研究 (2) —印象形成のための尺度項目の選定— 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
- 徳久良子・寺嶋立太 (2006). 雑談における発話のやりとりと盛り上がりの関係 人工知能学, 21, 133-142.